

二〇二三年度 三田学園中学校入学試験問題

前期A日程 国 語

〈注意〉各問題の解答はすべて解答用紙に書き入れなさい。

※出題の都合上、漢字にふりがなをふる、漢字をひらがなにするなど、本文の一部に改変を行っています。

※特に指示のない限り、字数制限のある問題では句読点や記号も一字として数えます。

受験番号	
------	--

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

朝日新聞がCM用のコピーで「言葉のチカラ」というフレーズを使っていた時期がある。「私たちは信じている、言葉のチカラを」というコピーにはかなり反響があったようで、多くの媒体で使われていた。

もちろん、私も物を書く仕事をしている以上、言葉のチカラすなわち言語情報を軽視するつもりはない。(a)、「言語情報がすべて」ではないのである。

言葉は「伝達的手段」であると国語の授業で教わった。しかし、「言葉の意味」を伝えただけで「伝えた」ことにはならない。

「どんなしゃべり方で」「どんな表情で」「どんな姿勢で」「どんなアクションで」伝えるかによって、伝わり方は天と地ほども違う。

こんな例を考えていただきたい。

日本史の授業が上手いことで定評のあるA先生がいる。A先生の授業をワープロで文章化し、音声ソフトで、カーナビの音声案内のような気持ちのこもらない声で、別のクラスの生徒に聞かせたとする。

「A先生の授業」と「音声ソフトの授業」では、伝えられる言語情報は同じである。しかし、^①伝わった「情報量」が天と地ほども違ってくることは誰でも想像できるはずである。

言葉以外の情報量、つまり「非言語情報」の量が圧倒的に違うのである。

非言語情報は、今まで重視されてこなかったもので、その大きさ、重要性が認識されていない。少し驚かれるかもしれないが、私たちが接している情報の中で「純粋なI」というものは存在しないのである。音声であれば、声の質、大きさ、テンポ等々の「II」の要素が大きいことはA先生の例の通り。「活字は純粋なIIIでは？」と思うかもしれないが、決してそんなことはない。活字の種類、大きさ、行間、紙の色・質等々、やはり「IV」が含まれている。それらをすべて排除してしまうことはできないのである。

仮に、朝日新聞の記事が現在の紙面・活字ではなくて、ピンク色の紙に手書きの丸文字で掲載されていたらどうだろうか。^②「言葉のチカラ」は激減するはずである。

一方で「純粋な非言語情報」はいくらでもある。というより、むしろそのほうが世の中には多い。風景、音楽、食べ物、触るもの……すべては非言語情報である。これについては後でまた詳しく述べる。

言語情報と非言語情報は、その特徴と取り扱い方が異なる。それぞれに得意分野、不得意分野があり、それに合わせて、上手に付き合っていくと、コミュニケーション能力は向上していくはずである。

会社や学校に通っていると、私たちはつい言語情報のほうに重きを置いて考えてしまいがちだ。少し、回りくどい話をさせていただく。

(b)「時計」という言葉について考えてみよう。

時計には、色んな種類がある。腕時計、置き時計、壁掛け時計、柱時計。色もさまざま。(c)、形状も丸や四角だけでなく、五角形のものもある。デジタルかアナログか、秒針付きか無しか、など言葉で説明すればきりが無いほどの「違い」がある。

日常会話で、それほど厳密に相手に伝える必要がなければ「時計」とだけ言えばいい。普通は、それで十分こと足りる。

ところが、あなたが不幸にも何らかの嫌疑をかけられてアリバイを証言しなければならぬ立場になったとする。事件があった時に、あなたがいた部屋には大きな目立つ時計があった。部屋には他のものはほとんどなかったとしよう。だから実際に見たなら、ある程度はどういう時計かを説明することができるだろう。「壁掛けなのに大きなデジタル表示の時計で、ちよつと珍しいな、と思ったのでよく憶えています」という具合である。

もし、本当は現場を知らなくて、友人に聞いた「あの部屋には珍しい時計がある」というシンプルな情報だけを手掛かりに嘘の証言をしようとするれば、説明ができなくなるはずである。どういう時計だったか説明できなければ、「証言が曖昧だな」と受け止められてしまう。

「時計」という言葉(＝言語)は、「時間を表す道具」という意味を持っている。色んな種類の時計の、「時間を表す」という本質的な部分を表現している。難しい言葉で言うと「概念化」という。昔の人が「時間を表す道具はすべて『時計』という言葉で表そう」という約束を作ったのである。

言葉は「概念」を伝えることに秀でている。しかし、色や形状のような情報を言語で正確に伝えるには、膨大な情報量を要することになる。数十行分の文章を費やしても、時計の外観を正確に第三者に伝えられるかどうか。

「X」という諺がある通り、言葉をいくら費やすよりも、非言語情報は正確に対象の形状を伝える。非言語情報は「V」に、言語情報は「VI」に情報を伝えると言ってもいいだろう。

④ 言語は「伝達の道具」ではあるが、情報伝達のための「万能選手」ではない。

⑤ というわけで、私たちは、言語情報と非言語情報の特徴を知り、道具として使い分ける必要がある。

この辺りが「情報」という言葉で一緒にされると、混乱を招いてしまう。一度整理してみるとわかりやすくなる。

二〇一一年三月十一日。日本は東日本大震災という大きな災害に見舞われた。私たちがテレビの画面に釘付けにしたのは、津波の恐ろしい映像だった。巨大な船が波に押し上げられて、内陸まで押し流される。町が丸ごと濁流にのみ込まれる。筆舌に尽くしがたい、とはまさにこのことだ。

映像という非言語情報でなければ、あの津波の威力は伝わりにくいのではないか。

後になって、災害の専門家はあの津波を「想定外だった」と言った。

しかし、文書では、三陸沖を同じクラスの津波が襲っていたことは、わかっていたのである。吉村昭氏の手になる聞き書き『三陸海岸大津波』もちゃんと記録として残されていた。だから「想定外」と言った人たちは批判もされたのである。

しっかりと言語情報として残されていたはずの「津波の恐怖」^{きょうふ}は、なぜ「想定外」になったのだろうか。私には、過去の三陸大津波に関しては、言語情報は残っているも、非言語情報（この場合は映像）が残っていないかったことと無関係ではないように思われる。つまり映像を見ない限り、実感として「わかっていた」人は少なかったのではなからうか。

もちろん、専門家が「映像がなかったので想定できませんでした」などと言うべきではない。それでもやはり、言語情報だけでは不十分な面もあったと知るべきである。

（竹内一郎『やっぱり見た目が9割』より）

注1：ワープロ ワードプロセッサの略。文章を入力し、作成する装置。

注2：カーナビ カーナビゲーションの略。人工衛星の電波を利用し、自動車の現在地などを画面に表示する装置。

注3：デジタル ここでは数字が表示されるデジタル時計の意味。

注4：アナログ ここでは針の角度で時刻を表すアナログ時計の意味。

注5：嫌疑^{けんぎ} 悪事を犯したのではないかという疑い。

注6：アリバイ 犯人とされた人が、事件の時にその場にいなかったことの証明。

問一 (a) (c) に入る語として、最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。ただし同じ記号は二度以上用いてはいけません。

ア また イ しかし ウ たとえば

問二 ——— 部①「伝わった『情報量』が天と地ほども違ってくる」とありますが、なぜ違いが生まれるのですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア A先生の授業は、他の先生が行う授業よりも上手いから。
イ A先生の授業は、話し方のみに工夫^{くふう}がなされているから。
ウ 音声ソフトの授業では、言葉の意味しか伝わらないから。
エ 音声ソフトの授業では、活字のもつ情報が失われるから。

問三 空らん I VI について、

1. I IV に入る語として適当なものを、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 言語情報 イ 非言語情報

2. V VI に入る組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア V…積極的 VI…消極的
イ V…直接的 VI…間接的
ウ V…現実的 VI…非現実的
エ V…論理的 VI…非論理的

問四 部②『言葉のチカラ』は激減するはずである」とありますが、筆者がそのように考える理由として最も適当なものを次の中から

選び、記号で答えなさい。

ア 記事のメッセージはすべての年代の読者を対象としているが、かわいらしい紙と文字では若者のみをターゲットとしてしまうから。
イ 派手な配色とかわいらしい文字は読者の目をひきつける一方で、記事そのものが伝えるメッセージに注目することができなくなってしまうから。

ウ 記事のメッセージとともに活字の種類や紙の色といった非言語情報も伝わってしまうので、その印象が大きく変わってしまうから。
エ 声の質や大きさといった非言語情報が記事のメッセージを伝えるためには重要であり、活字ではそれが失われてしまうから。

問五 部③「概念化」とは、どうすることですか。二十字以内で答えなさい。

問六 X に当てはまる表現として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 百聞は一見に如かず イ 論より証拠
ウ 釈迦に説法 エ 話し上手は聞き上手

問七

——部④「言語は『伝達の道具』ではあるが、情報伝達のための『万能選手』ではない」とありますが、同じ内容の部分を本文の前半部分より二十五字以上三十字以内でぬき出して答えなさい。

問八

——部⑤「言語情報と非言語情報の特徴」とありますが、それぞれの特徴を五十字以内で具体的に説明しなさい。

問九

——部⑥「筆舌に尽くしがたい、とはまさにこのことだ」とありますが、ここでの「筆舌に尽くしがたい」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 語りきることができない イ 書いても意味がない ウ 表現のしようがない エ 言葉にしたくない

問十

——部⑦「『想定外』と言った人たちは批判もされた」とありますが、専門家にとって「想定外」のことが起こった理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 知識としては理解していたが、実際の津波の経験が不足していたから。
イ 津波の恐怖を伝える情報を軽視し、楽天的にとらえていたから。
ウ 批判されることを恐れて、正確な情報を公開していなかったから。
エ 文書の記録だけでは、その実際の被害を想像できていなかったから。

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

尚輝^{なおき}はいつも、空に浸^{ひた}して染めたような青いＴシャツを着ているから、どこにいても目立つ。室内にいたらもちろんだし、外にいたとしても、その青はなぜだか空より鮮^{あざ}やかに見えるから、結局目立つ。

私は小さく体操座^{すわ}りをして、メガネをかけた外したりしていた。昨日、メガネをかけたまま眠^{ねむ}ってしまったからだだろうか、少し頭を下げたら落ちてしまいそうなくらいにフレームがゆるんでしまっている。

「孝子^{たかこ}、もうコンタクトにすれば？ 高校卒業してもメガネで黒髪^{くろかみ}だったら、いつまでたっても優等生^①って感じに見えるぜ」

尚輝^{とまり}も隣で、体操座りをしている。できるだけ自分を小さくしようと、私はぎゅっと膝^{ひざ}をたたむ。尚輝はそんなに大きくない体になりに大きなＴシャツを着ているので、鎖骨^{さこつ}の影^{かげ}まではつきり見える。くぼんでいる部分は指で押したような形をしていて、そこにだけ影のかけらが染^しみついてしまっているみたいだ。この薄い体^{うす}の中にたくさんの骨と内臓^{うちぞう}が詰^{つま}まっているようには見えない。

黒いスピーカーから音が漏^もれている。小さくてポケットに入るからって、そのスピーカーと音楽プレイヤー、あと財布^{さいふ}と携帯^{けいたい}だけで、尚輝はふらふらどこかへ出かけたりする。

私はいつだって、カバンの中身を丁寧^{ていねい}に確認^{かくにん}してからでないと家を出られない。

「……久しぶりに、あそこの階段使^{つか}った」

ふう、と息を整える私に、「孝子は、真面目^{まじめ}だからな」と、尚輝はいじわるそうに笑った。なんだか少しズレたことを言われたような気がするけれど、案外的外れではない気がする。

地上から聞こえてくる生徒たちの声や足音から隠^{かく}れるように、私たちは東棟^{とうとう}の屋上で体操座りをしている。たまにふざけて尚輝がいきなり立ち上がったたりするので、私はそのたび「見つかるって！」と声をあげながら彼のジーンパンを掴^{つか}むことになる。そのたびに尚輝は「孝子はやっぱり真面目だな」と、安心したように笑ってみせる。私の真面目さを試^{ため}すように、尚輝はいきなり立ち上がる。もちろんそんなことはできない私は、今犯している罪を少しでも小さくしたいという一心で、ぎゅっと思いつき膝をたたむ。

尚輝に連れてきてもらうまで、東棟に屋上があることすら知らなかった。そもそも東棟は基本的に棟そのものが立ち入り禁止だったし、気味の悪いうわさもあったので、近寄ろうと思ったこともなかった。

だけど、尚輝にはそんなこと関係ないみたいだ。今日だって何のためらいもなく、階段を上った先にある屋上へ出るドアの右下を四回ほど蹴^けっていた。あそこを蹴れば、ドアが開くらしい。「使われてないからって適当だよな」と尚輝は笑ったけれど、ドアを蹴る音は朝の校舎によく響^{ひび}いて、

② 私はずいキョロキョロしてしまった。

屋上にいると、空がいつもより近いから、いつもより寒い気がする。それに、なぜだか、少し自由になった気がする。だけどそんなことを口にしたら、まだ二回しか来たことないくせに、と、尚輝に笑われてしまうかもしれない。だから言わない。

③ もう一年以上も前に白と黒の制服を脱ぎ捨ててしまった尚輝は、きっと私なんかより何倍も自由だから、いまさらそんなこと思わないのだろう。

ズレたメガネを直しながら、隣にいる尚輝をちらりと見る。スピーカーから漏れてくるR & Bに合わせて、小さく肩を揺らしてリズムを取っている。ダウンのリズム。ヒップホップはダウンでリズムを取るんだよ、とかかなり昔に言われたことを覚えていなければならないけれど、私はヒップホップ以外にブレイクダンスくらいしかダンスの種類を知らない。ヒップホップは、っていうことは、他のダンスでは他のリズムがあるのだろうか。

大きなTシャツも、裾を輪ゴムで留めたゆるいジーンパンも、長めの茶髪も、ニューエラのキャップも、よく似合っている。

尚輝に似合うものは、私にはひとつも似合わない。

「卒業式には出るの？」

自分で言ったあと、こんなこと訊いてどうするんだろう、と思った。

「いや、それは無理でしょ」

尚輝はキャップを取って髪の毛を指さす。もともとその色だったみたいな顔をして風に揺れている茶色い髪の毛は、不思議と、高校を退学させてしまうような悪者には見えなかった。尚輝にはこの色が一番似合うんだから、これでいい。

尚輝の茶髪は、キャップの形に沿ってへこんでいる。

遙か下のほうから、女の子たちの笑い声が聞こえてくる。あと三十分もしないうちに、卒業式が始まってしまおう、らしい。こんな場所にいと、卒業式さえもどこか他人事を感じる。私が「式、もうすぐだね」と言いながら、ぱたんと携帯を閉じたたん、尚輝はすっと立ち上がり、下にいる子たちに向かって「おーい！」と声を出した。

「大学デビューの準備は大丈夫かー！」

「ちよっと！ もうほんとやめてって！」

柵から身を乗り出して叫ぶ尚輝のジーンパンを、私は低い姿勢のまま思いつき引つ張った。「見つかるって！ 馬鹿！」 ④ こんなときでも、私はひそひそ声のマックスみたいな声しか出せない。ジーンパン脱げる脱げる、と尚輝は楽しそうにしゃがんだ。

しばらくしたら空がこぼれてきそうな青いTシャツに、しゃかしゃか音を漏らすスピーカー。薄い胸板にVANSのスニーカー。すべていつもと一緒なのに、これからすべてが変わっていつてしまうような気がする。

「下の奴ら、え？ とか言ってちよっとこっち見てた」ニヤニヤしながら尚輝はあぐらをかいた。ベルトを下げてジーンパンを穿いているから、股下の部分がピンと張っている。大学デビューとか失礼だよ、と私が咎めると、尚輝は私のゆるゆるのメガネを取って言った。

「孝子って、授業サボったことあるの？」

メガネを取られてしまうと、至近距離にいたって相手の顔すらよく見えない。視界が悪くなった中で、尚輝の声だけが聞こえてくる。急に不安になる。ちゃんと見ていないと、尚輝はそのままいなくなってしまいうさだ。

「そんなの、ないけど」

メガネ返して、と手をばたばたさせていると、ぼんやりとした視界の中で尚輝がまた笑った気がした。

「孝子らしいや」

いつもの声、いつものせりふなのに、^⑤ なんだか私は少しだけ泣きそうになった。しっかりと尚輝の輪郭^{りんかく}を捉^{とら}えていないと、こんなにも不安になる。

いつだって隣にいた、私の幼馴染^{わがなじみ}。だけどいつだって、隣にいると少し悲しくなる。私は尚輝みたいにはなれない。すぐそばで広がっている尚輝の世界に、一步も足を踏み出すことのできない自分の臆病^{おくびょう}さに、いつも悲しくなる。

尚輝の茶髪が風に乱れる。最後にこの髪の毛に触^{さわ}ったのはいつだっただろう。確か、とってもやわらかい猫^{ねこ}っ毛だった。

あと二十分で、卒業式が始まる。

メールが来たとき、私はリビングで油性ペンを探していた。「そのへんにあるでしょう」と、母が洗い物をしながら面倒くさそうに言うけれど、少なくとも目に見える「そのへん」にはない。慌^{あわ}ただしくテレビの前を横切ると、ゲームをしていた中学生の弟から「姉ちゃん邪魔^{じゃま}!」と怒鳴^{どな}られた。コードが裸足^{はだし}の指にからまりそうになって、また弟に怒鳴られる。

あしたは卒業式だから、最後のホームルームで卒業アルバムが配られる。そうしたらきっと、クラスの女の子たちは寄せ書きをしあうだろう。卒業アルバムのつるつるのページはきつと、普段使っているようなペンではダメだ。あのぴかぴかな白にインクが弾^{はじ}かれないように、油性ペンを持っていかなくちや。私が多めに持って行って、クラスの女の子たちに貸せばいい。

いつまで経^たっても油性ペンが見つからないままでいたときに、急に尚輝からメールがきた。

【あしたの朝、式が始まる三十分前、東棟の階段で待ち合わせ】

急いでいたのか、ボタンを一回押し損^{そこ}ねている。「待ち合わせ」って、なんかインチキ予言者みたい。尚輝はおおざっぱだから、^⑥ メール^⑥の文字の打ち損^{そこ}じなんていつものことだ。本人は全然気にしていないのだろう。

尚輝からメールが来るなんて、本当に久しぶりだった。一年ぶりくらいかもしれない。絵文字も句点もないメールは、尚輝の声をそのまま文字にしたみたいだ。私は、【わかった。けど、久しぶりだねとかそういうのなの?】と返した。それから返事はない。それも、尚輝らしい。

水道から流れ出る水の音を聞きながら、私は、もう油性ペンを探すのをやめようと思った。自分の真面目さに嫌気^{いやけ}がさす。寄せ書きをするときにペンが無かったら、誰^{だれ}か持ってる人いない? って、大きな声で言えればいい。ああごめん貸して貸してー、って、他の女の子たちみたいに言えればいい。

^⑦ だけど私はそんなことできない。いつも小さなことを気にして、目を凝^こらして、避^さけるべき障害物を探している。尚輝みたいに、ずっとメールをしていなかった友達にいきなりメールを送るなんてことも、私はできない。メールアドレスを変えられていたら、それを教えてもらえてい

かったらって考えると、怖いからだ。

私はいつだってそうだ。遅刻もできないし、忘れ物だって、テストで赤点をとることだって、授業をサボることだって、できない。しないんじゃないって、できない。

だから、尚輝が高校を辞めてしまったとき、私は、やっぱり私と尚輝は別々の場所にいる人間なんだと思った。それは発見ではなく確認で、ずっとずっと前からわかっていたことだった。

(朝井リヨウ『少女は卒業しない』より)

問一

——部①「優等生」とありますが、これと似た「尚輝」の「孝子」に対する評価を三字でぬき出しなさい。

問二

——部②「私はついキョロキョロしてしまった」とありますが、この時の「孝子」の心情として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 学校の備品であるドアを壊してしまって怒られることを恐れている。

イ 屋上で尚輝と二人だけの時間を過ごせることに優越感を得ている。

ウ 立ち入り禁止の東棟にいたことがばれてしまうことを心配している。

エ 屋上にいくことで早く自由な気持ちになりたいと胸が高鳴っている。

問三

——部③「もう一年以上も前に白と黒の制服を脱ぎ捨ててしまった」とありますが、これはどういうことを意味していますか。解答らんに合うように十五字程度で答えなさい。

問四

——部④「こんなとき」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 見つかってしかられたとしても、この後の学校生活に影響が出ないであろうとき。

イ 尚輝が大胆な行動をしたことに対して、全力で止めなければならぬようなとき。

ウ 自分以外の女の子たちの笑い声に尚輝が反応したことに、腹を立てているとき。

エ 卒業式の最中に先生が屋上までやってくるはずはなく、さばりやすいとき。

問五 ―― 部⑤「なんだか私は少しだけ泣きそうになった」とありますが、なぜですか。二十字以内で答えなさい。

問六 ―― 部⑥「メールの文字の打ち損じ」とありますが、「打ち損じ」の部分をぬき出し、意味が通るようにあらためなさい。

問七 ―― 部⑦「だけど私はそんなことでできない」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 友人に対していつも気遣いをし、優しさをもって接するようにしているから。
- イ 友人関係や他人からの評価を気にして、失敗しないように過ごしているから。
- ウ たとえ友人であっても、他人から物を借りることはいけないと理解しているから。
- エ 前もって準備することが大切であると小さなころから身に染みについているから。

問八 〰〰〰 部「その青はなぜだか空より鮮やかに見える」とありますが、これは「孝子」の「尚輝」に対するどのような気持ちを表現していますか。本文全体を読んだうえで三十五字以内で答えなさい。

問九 この文章における表現の特徴についての説明として、適当でないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 孝子と尚輝が何度も対照的に描かれることで、二人のちがいが強調されている。
- イ 孝子と尚輝の短い会話のやり取りで、かえって二人の仲が良いことを表している。
- ウ 尚輝の服装や音楽の好みを詳しく描くことで、その人物像を具体的に表現している。
- エ 出来事を順序通りに描かないことで、孝子の後悔が大きいことを表している。

三、次の各文の——部と同じ用法のものを、あとのア、イ、ウの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① 遠く離れて暮らす母の身が案じられる。

ア 今日はずいぶん部屋が明るく感じられる。
イ 社長は明日こちらに来られる予定だ。
ウ 彼はだれよりも信じられる人物だ。
エ 周りの人からほめられるようになりなさい。

② 今日の夕食はおいしそうだ。

ア あの人はアメリカ生まれだそうだ。
イ 宿題に追われてかわいそうだ。
ウ もちろん彼も来るそうだ。
エ 今にも眠ってしまいそうだ。

③ 今夜はテレビを見ない。

ア この部屋はきたない。
イ 読みたい本が書店にない。
ウ 僕の兄は頼りない。
エ プリントが足りない。

四、次の①～④のグループの熟語を打ち消す場合、その頭につける漢字が異なる熟語をそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|------|------|------|-------|-------|
| ① | ア 公平 | イ 効率 | ウ 公式 | エ 協力的 | オ 論理的 |
| ② | ア 整理 | イ 成年 | ウ 理解 | エ 解決 | オ 完成 |
| ③ | ア 制限 | イ 関心 | ウ 気力 | エ 関係 | オ 常識 |
| ④ | ア 発表 | イ 定期 | ウ 正確 | エ 誠実 | オ 安定 |

五、次の各文の——部がかかっているのはどこですか。それぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 長らく——箱^アの中^イに——しま^ウっておいた——手紙^エを——取^オり出して——渡^カした。
- ② しばしば——私^アたちは——同^イじ意^ウ見^エの——集^エ団^オを——作^カりがちだ。
- ③ 少年^アは——忍^イび足^ウで——枝^エに——とま^オっている——小^カ鳥^キの——後^ケろ^コに——近^カづいた。

六、次の各文の——部のカタカナを漢字に改め、漢字はひらがなに改めなさい。

- ① この話は昔からデンシヨウ^アされてきた。
- ② 川はドシャで完全^イにせき止められていた。
- ③ ついに現役をシリゾク^ウことを決意した。
- ④ 潮が引いていき干潮時^エとなった。
- ⑤ 親を敬^オう気持^カちを大切^キにしよう。

